敬神訓蒙說教道之話

014314－000－2

特18－236

説教道之話（敬神訓蒙）

宇喜田　練要／著

M25

ABB－0657

特18
236

# 敬神愛國説教道之話

## 目錄

三條教憲

第一條　敬神愛國の旨を體すべき事

第二條　天理人道を明にすべき事

第三條　聖上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事

第四條　皇室の敬神とは誠意正直の行ひを以て其業を勉むる話

第五條　以て祈願すれば神明之れを照鑒し給ひ必らず驗あるを以て敬神を勸むる話

明治文庫

第三　正直の階段を辨別して常に己れを慎しみ敬神を盡すべき話
第四　人々の身代は天祖の與へ給ふ天祿と心得べき事
第五　正直愈堅固にして神明の加護愈著しき話
第六　正直の人は神明の御助けを得るを譬へを以て話
第七　私欲を捨てゝ眞誠の敬神愛國を諭す話
第八　正直の貧者遂に貧困を逃れ正實愛國を知る話
第九　愛國の眞理を諭して正直清潔を勸むる話
第十　天理人道を明示して五倫の道を守らしむる話
第十一　人は萬物の靈長たるの義を説て五倫を正しくす





るを眞實の樂とする話
第十二　幽冥照鑒する處あり必らず五倫の道を正しくすべき話
第十三　惡風弊習の妄誕を破却する話
第十四　顯界の人五倫の道を守れば幽冥の神意に協ひ威力倍增し給ふの話
第十五　難者を諭して聖上の大恩を知らしめる話
第十六　皇上の御心を体認し之れを所行とせば神明の御心に協ふ話
第十七　皇上の御心を体認せば死なぬ人の仲間に入り眞

の樂境に遊ぶ話
第十八　皇上を奉戴するの至誠は各其家を治むるにあり之れ所謂眞の知恩報恩とする話



目錄畢



敬神訓蒙

# 說教道之話

宇喜田練要著

第一　眞實の敬神とは誠意正直の行ひを以て其業を勉むるにある話

抑吾が日の本は世界萬國に勝れて最も芽出度國柄なることは今更言ふまでもなき事ながら茲に王政復古明治の聖代と改まり三條の大教憲を立てさせられ　皇運日に月に隆盛の進歩を加へ君臣和合億兆人民皷腹の樂みをなすは畏こくも上の御恩澤にして　皇祖天神の功德に由ると心得て今日諸國に神導職を置き衆庶を諭して　皇祖の御恵みと吾が國体の如何を知らしめ以て敬神愛國の誠意を盡さしめ治國の道を計り給ふ吾が國民たる者何を以

て此鴻恩に報ひ奉るべき曰く徹頭徹尾神を敬ひ國を愛し誠意正心以て國益を計るにあり夫れ我が靈魂我が身体は之れ皆神の與へ給ひし所なれば此世界を獨り我が物と思はず正直誠意以て家を治め人に交り私欲を制し國利の増進を計れば神明いかで之れを加護し給はざらんや其極遂に幸運己の身に及ぶ事必せり然るに此頃或る人説師の教話を聽聞し問ふて曰く

御説教心根に徹し難有こと際限なく殊更敬神の説諭を承り候處我等今日暖かに衣を着し飽まで食し寒熱風雨を凌ぐ家宅に居住すること皆天神の賜ものにして恩澤を被らざるものなくろれ而已ならず我等の魂は即天神より賦與する處にして一身の主宰たるものなり依之知覺思慮の分別を辨へ手足の四肢身體の運動するも皆これ天神の賜ものにして靈あ





ればなりとの御示しは實に難有御説教なり今までは衣食住の三つは我等が働きの力にて美き衣服を着やうがどんざのやうなる穢き衣服を着やうが皆我働の有無によると存じ込み居りましたが衣類家宅は申すまでもなく我魂までが神様より賜わるものと承たまわれば尊崇信敬は勿論のことにて即今發明致して大切なひ神様より賜る魂を悼ましむること恐入たる事なりとて我家に歸りて見れば兒孩は大勢厄介もの計りにて夜を日に續ぎて稼ぎ蹶かねば家族を糊口せることが六か敷ろれ故、妻がぐず〳〵仕たり兒孩が無理を言ふたりいたしますれば平常の寵愛を失ふて腹が立つまゝに打擲致したり貴産の事件につきても損を仕たり欺誅れたり我駈引の行屆かざるより貨を設けずこのふたり婢女が踈麁にて鍋を破るやち丁稚を使に遣れば還りが遲ひのみならず大事の

物を途中にて落したり妻が隣家の家婦さむのことを言ふて羨みたり貨の融通の手段に心配仕たり都てかやうなる事件に魂をいためり日を度り朝夕神様を再拜の拍手の内にも産業の事件に氣が移り背中に眼はなけれども釜の下の焚木が燃へ出たる事までが氣になり所詮今日ぐらしの貧乏人は何程御説教に一切の物は皆神さまの賜ものと聽聞致しましても稼がねば今日が度られず稼げば草臥て氣不性となり神さまを再拜どころではなひ寢て仕舞ひ果ては御説教に疑惑が發りまして敬神とて眞實から神様を信敬致す氣になりませぬ併し御説教聽聞の間か又は存じもよらぬ貨殖けの註文を聞ました時は眞實敬神の心になりまして是が神さまの御加護じやく功徳じやと存じ込みますさりながら欲しひか惜ひか憎ひかは可愛か腹の立ときは諷張忘れて仕舞ます何卒賞産の事件に





拘りても敬神を忘失ぬやうに御説得の御講究を希ひ奉ります

説師の曰く成程其許の了簡にては敬神といふ義は唯心に尊信を思ひて再拜頓首することゝ聞得られたるは其通なれどもそれだけにては其許は説教聽上手と申ものにして是を上手に聞得る人は敬神は身體にて敬神を行ふことゝ得意するなり心に思慮するが故身體に行われると雖も思ひ通徹しには貴産に拘わるもの成し難きものなりこれに依て身體にて敬神を行ふ時は何時にても敬神を思はるゝものにして假令婢女が踈麁しても孩兒が無理言ふても神を敬ふことを思はるゝもの也譬へば両替爲替座の門口に行み多くの貨を見て欲ひものじやと思ひ結ても誰も盗賊と名づけずさりながら手を出して當百一枚にても盗めば忽ち盗賊の名は遁れず斯

の如く身體にて敬神を行なへば日々夜々の所作が敬神となり貴産の稼ぎがとりも直さず敬神の誠が顯れるなり依て孩兒の無理も婢女の疎、麁も心に分別がつきて敬神の思ひを忘れ失ざるなりされば今天祖の至誠の儀を以て其許の問を講究せむ

夫天神は天地開闢して萬物を創造し天祖の天照大御神萬物生成蕃殖して萬民撫育成し給ふ是皆天祖の御恩澤に非ざるなし又天祖より以降方今の萬庶といへども卽往古の群神の胤裔にしてろの本源皆天神より出でたるなり又我等の祖先より我輩に至るまでの血系は皆此御國の地味を喰ひ連綿として相續したるは全く天祖の賜もの地味を喰ふ故なれば是至大至廣の恩澤に非ずや又我等も往古の群神の胤裔なりと發明すれば我遠祖の建國補佐のため苦情の勳功を思はゝ方



今天皇萬民撫育のため宸襟を惱ませ給ふ御意を體認し奉り我輩の遠祖群神の苦情に倣ふて方今治國平天下の御手傳と思慮し面々正直を宗致とし己々の家族を治むべし家族を治むる本原には農商工とも業体を勉勵するに限るべし業体勉勵といへども我身の爲に業体を營むと存じ込ば治國平天下の御手傳とはならず依て天祖の御德輝は貴賤長短に拘はらず平等の御恩德を被むる御德厚の九牛の一を眞似し奉ると思慮し我々それ〳〵の業体は人のため國土の爲に營むてと得意して商人は融通を計り此所になき物を彼所より取寄せ彼所に多きものを薄き所にて捌き方をつけ買場賣場を得意且那とこれを心得永く賣人買人の離れざるやう實意を盡し薄利を取りて勉强すべし又職工は人の爲方になるやうに深切を以て細工を勵み新工風を凝し永世國産の洪利に注

意して徳を行ふことを專務と心得可し農は星を頂戴して耕し蚊遣火の蔭に食を喰ふの古語に順して荒蕪不毛の地を開拓し瘠田を膏腹し精勉して作徳國益を計る可し斯の如く身體を以て徳を行ふを敬神の誠を顯すと言ふものにして神明の御意の正直を行ふといふことなり依て神明の御意と衆庶の心とは少しの違ひにて産業を我が爲に成すか人の爲國土の爲に成すかの違ひが大驥な違ひと成行ものなり我が爲に成す業体と心得へば漸々と不浄なる欲心増長して人道の心を失ひ終には欲の爲に人倫の道に遠く隔り禽獣に等しき行ひとなり愚痴心よりやたらに腹を立てたり後悔仕たり物の分別思慮が疎くなり欲の爲に行くさき眞黒暗にて世事の大なる災厄危難に罹り大なる損失して立身出世を妨るものなり假令強情を以て我慢に貨を貪り集るとも其心不浄にしては



幽冥の神必ず罰し給ふべし然るに人の爲國土の爲に産業を營むものは自然と神明の御加護により其心正直になりて物の成と成らざるを明確として辨別し無益の事件に時日を度らず世事の危難災厄を祓ひ除かれ産業繁榮して家運吉祥ならむされば斯の如く得意せば其心清浄にしていつも神明の御意に相似る故に何時にても神様を信敬し尊崇再拜の行なはるゝなれば肅で敬神は身體にて信行するを肝要と知る可し

## 第二　至誠を以て祈願すれば神明之れを照鑒し給ひ必らず露驗あるを以て敬神を勸むる話

小理窟言ふ癖のある男進み出て曰く私は何角につけても神さまに縋り奉り鼻がなり腹が痛み商賣繁昌貨殖け孩兒の無難に生長運命長久悉先無滞寄りますやうに迄神さまに御苦

勞を掛ますが都て私に限らず神前へ參詣致しまするとと人々が當病平愈家内安全道中無難船中安泰大願成就何歳の女安産の御願ひ等の祈願を御請なされる神さまは御一方さまにて大勢が一時に轉々に言上し奉るさて〳〵御聞取に御聞が敷ことなれども人の聞て宜しきことは大音聲で言上致します故に御聞取も宜しふでざりますが内證の事件は何やら口の内にてぶつ〳〵と丹誠を凝して言上致し又遠方の者は遠く隔てゝ裏の隅から祈願を掛たり殊に神前へ參詣仕ながら願事を言上せず心中所願滿足抔と祈願するものも御座りまするが神さま其至誠を御鑑遊ばし感動して靈驗ありしこと例證枚擧して數ふ可からず然るに前段に申すが如く大勢群參して一時に祈願し殊更口の内にて言上し遠方から立願する輩を神の威神力とは申ながらも一々に鑑み如何して知ろし召すことやと不思議に存じます故得と合點のもくやうに御說得なされ欲下ば彌敬神も至誠に再拜し信心も增長致しますと存じますこの儀御示敎に預り度ねがひます

說師の曰くこれは以の外なる理窟にて神さまならねば此儀は確然とわかる事件ではない併ろふ斗り言ふては其許もなか〳〵承知はせまじ依て今誠義を以て談話すべし先よく思ふて視られよ神さまは何も醫者はなされず貨貸は猶更なされず其外失物の占はなされず然りながら天理に叶ひし事件を祈願すれば其至誠を御鑑みなされ感應靈驗あるは必然なり天理と謂ふは親の爲に子孝心を以て祈願し主の爲に家僕義を凝して祈願し婦夫の爲に貞心以て祈願するの類ひなり然るに是等の輩日々祈願するもの數多これある可し其許の謂はるゝ如く大音で祈願のものの口の内にて願ふもの遠方よ

り立願するもの等が如何程群參して祈願するとも神さまは一々に照鑑まします是如何となれば人は萬物の靈なりと謂ふて其魂は天神より賦與する處なれば天神より我魂は預りたるものにして取も直さず我魂が神さま也然れば我等生れたる時は我魂は神なれどもうれより生長に隨ひ眼に諸の色を見ては不淨の愛欲を發し耳に我好むことを聞たがり鼻に色々の香を嗅て薫りよきを慕ひ舌に物の味を味わふては美味を好み身に暑寒堅柔痛癢を觸る等にて我魂の神を穢すといへども甚敢に至らずさりながら段々漸々に不淨の欲心隆盛に隨ひ我魂の神は穢れて隱れさせ給ふて後には眞黑となり給ふ然るに世事の災厄に罹りて迚も人力に及びがたき時眞實後悔して冥助を祈り又神明を欺かず天理にかのふ儀を祈願を込る時神を無上至尊の思ひを成し至誠信敬し奉りて立願する故我魂の神穢れて眞黑なるも忽ち清淨と澄みわたる也譬へば大空の月照輝くといへども糞水濁水には鮮かに蔭を宿さず濁水といへども澄めば月鮮かに蔭を宿すが如くされば大空の月下らずして池中に蔭を宿し又水昇らずして池中に大空の月を宿す大空の月を離れて池中の月なく池中の月を離れて大空の月なし斯の如く大空の月は天神の如く池中の月は我等の魂の神の如く依之何程群參の人々にても又は遠方より立願の人と雖も神これを照鑑して知ろしめすと謂ふは此義理にて天月池月感應する故幾千萬人にても至誠を以て敬神せば照鑑空しからずあら有難や尊崇すべきとならずや恐れ肅て歎く可からず

## 第三　正直の階段を辨別して常に己れを慎しみ敬神を盡すべき話

又曰く唯今の御示教にて粗相譯りまして難有存しまするれにつき又御尋申上ます我等も至誠正直清淨なれば我か神さまのやうに聽聞致しましたが我か神なれば別神天祖樣でも外の神さまでも敬神とて尊信はいらぬものと存じられます此儀御ついでに御示しにあづかり度存じます

說師の曰く貴樣は余程理窟をいふことが上手じやが大きに心得違を仕て居られる前段に教示する處は人の魂が天神の賦與する處にして其魂が卽ち神にして其魂の所作か身體の所作となり身體の所作を離れて魂の所作なきものなれば其許の言はるゝ如く至誠正直清淨なれば其身が神さまじや神なれども敬神とて天祖をはじめ奉り外の神を尊信敬拜を成すことはいらぬことゝ思ふが大なる心得違にて最うろの心が發た時卽坐に至誠といふこともなくなり正直もやがむで仕舞ひ清淨も不淨となり魂の神も穢れて仕舞ふ也これを潛上我慢と謂ふて甚敷不淨なり然れば今其許の慢心を教諭せむ譬へば大空の月も黑闇とて月體はあれども見へぬ時あり糸目程の光り輝く月もあり又一歩通光り輝く月もあり其外二三四乃至七八歩通り光輝く月又滿月とて全體清光にして輝き度る月もあるが如し然るに其許の正直清淨は舊曆の三日月の如く暫時の間の正直清淨を以て滿月終夜中光り輝くが如き天祖の神に同ずるは甚敷潛上慢心に非らずや正直と雖も段々の階級あり況や天祖の御神ろの外の諸神は恐れ多くも御生涯の御靈正直清淨なればこそ數萬年の今に御德澤を慕ふて尊崇し奉る依て其許も至誠正直清淨の所行を生涯怠らず成し給はゝ人も自ら敬ふべく然るに正直の志しあるものも屹度肅まずんば物の緣に觸れて志しの變るものにし

て花を視れば花を愛みて心に悼み演劇を看れば演劇の心となり相撲を看れば手足に實の入るのも知らず力み軍談を聞けば武勇の心となり斯の如くかけも搆ひもなき事を眼に見耳に聞くすら移り易く心の變り易きものなるにまして況や表わに毀られたり譽られたりすると一際心の恭みが緩み變るもの別て陰にて稱られたると譏られたるとは辛抱のならぬものにて表に譽れたり毀れたるよりは十倍に中るものなり又ろれよりも恐ろしきは利德と衰微と苦勞と安樂との四つは正直清淨の大恐敵にして余程堪へたる人も辛抱を破らるゝものなり所謂利德とは貨殖につきて欲心の不淨隆になりて道の譯らぬやうなること也衰微とは月々歲々に產業の衰微することにて漸々に衰へに臨むもへ實に心の痛むもの也苦勞とは貧苦に逼められて身心堪へざること也安樂とは平常何一ッ不足なく物が充分なるが故心驕奢となり易きもの也されば此四ッは心を用ひて愼みを忘失るべからず又その上にも恐るべきは妻子の愛に溺るゝよりして正直清淨を破らるゝものなり初め一二度は妻が何を言ふても理非善惡を辨別して堅固に恭み居れども三度四度と度を累ぬれば終には理非善惡が譯らぬやう成りて正直清淨を破られるもの例證數多あれば恐れても恐れ肅みても肅しむ可きこと也斯の如く物の緣に觸れて正直清淨を破らるゝ物なればれりは神社へ參詣して神の緣に觸れ心を洗濯し清淨と成して正直を相續成しいよ〳〵敬神尊崇を精勵すること肝要なる可し

第四　人々の身代は天祖の與へ給ふ天祿と心得べき事

貧賤なる女進み出て曰く私が夫は車牽にて荷車を牽たり人乗車を牽たり牛馬の如き業体にて殊に孩兒は大勢にて實に今日は安樂なことじやと思ふ日は一日もございませぬ故神さまへ祈願を込めまして宜しき業体にありつき安樂に今日を度られますやう願ひ居りますれども頓と御利生がございませぬ故神さまは居まさぬかと疑がひが發ります此儀を御示しに預り度ぞんじます

説師の曰く成程女の了簡にては正直を以て身體とし正直を以て食物となし正直を以て力と成し給ふが故に其許何程神さまへ祈願致すとも御利生のなきは眞實敬神の心のなき證據の驗しなり然るに眞實敬神の實意を盡さむと思はゝ先其許の夫車牽の業体を足納すべし併雖も生涯車牽仕て終るは甚だ殘念成るものなれども如





何はせむ車牽すべきものは其車牽が天祿にして車に乗るべき人は乗べきが天祿貴賤貧福ろれ〳〵己々の持まひが天祿にして皆天祖より賦與し給ふ處なれば己々の業体は天祖よりの賜ものゝ業体と發明すれば假令牛馬の所行に等しき車牽にても苦とも思ふべからず悲とも思ふ可からず天祖より役せられたる所なれば其役務を大切に相勤足納して勉勵すれば是眞實敬神の實意と謂ふものにして此心底にいつまでも違背致しませぬやう又怠り油斷致しませぬやうと神さまへ祈願致さば顯然と御利生はあるものなれども其許の望にては樂な業体にてしかも貨殖けがたんとありて身は働らかずして安樂に暮したき了簡なれども此等の望みあるものは神は至て御嫌ひなれば何程祈願するとも神は居まさぬ如く也然るに我が非道の祈願を込めて利生のなきを以て神は居

まさぬやと疑ふは言語同斷のことにして恐れ肅むべきなるに兎角女人は其心少量にして然も了簡が曲りくねりたる者多く其上下賤のものは猶更其心不淨なるものにして我は下賤もの貧乏人じやと思ふ意が離れぬものにして有福なる人に諂ふ氣味あり又有福なる人を横推量して彼人は貨が有ると我等を卑しむると思ふが下賤の根性なり其例を擧て謂へば盲人は我が眼が見へぬ故人が我儘をすると思ひ聾は我は耳が聞こへぬもへ人が兎角我を毀ると思ふがごとく下賤の者の根性不淨なるも其の如くなれば能々肅むべきこと也されば前段に說くが如く如何樣の業体にても皆天祖より賜る所と得心して分外の望を立てず其業を勉勵するを眞の正直にして其心忽ち安心と成りて足納するもへ横道なる不淨を思わず行なはず依之神の御加護益深く終に立身出世して安樂に今日を度られるものなれば必ず眞實敬神の實意を勵むべし

## 第五　正直愈堅固にして神明の加護愈著しき話

愚直なる男進み出て曰く私は商人でござりますが神さまを敬信し奉るに第一我心を正直清潔に致し候やう御說教に承りましたが商人は迚も正直に心を致すことは成りませぬ其譯は何程私が正直に致しましして如才なく然も薄口錢にて賣直を申しても先方の買人て直限てざりを致さねば買ぬと謂ふ風儀の人も澤山でざります故不實に仕舞ひますか又は損を致しまする故無據出方だいの掛直を申するに邂逅に直限らずに買ふ人は氣の毒にでざるけれども無價にて取りて來たやうに無理無体に直限る人が多くでざる故迚も商人は正直に致すことが成ませぬが何卒正直に商賣致しまして

貨殖の出來る工風はでざりませぬか是等の事件を御示教被下たし

說師の曰く成程尤なる事件なれども其許の言はるゝ如くには正直に薄利を貫らひ賣直をいふても買人は目太無性に直限がもへ無據掛直をいふて正直には商賣が致されぬといふは全く其許の舊弊の仕癖の離れざる所にして適々大切なる御說教を聽聞し一端發明して正直に商賣をする氣になること容易ならざる其許の仕合といふものにして折角神の道に近ふなりたるを退轉するは殘念なことなれども是等のたぐひは世には澤山あるもの也この儀につき所謂あり一には諺にも寸善尺魔とて纔かに正直の善心を發すれば大なる障りの出來るとの訓めなれば平常に心得置て是等の事件に値へばまず〳〵堅固に正直を守るべきこと也二ッには適々正直の心と改心すれば是等の事件を司る神其ものゝ正直心に堪るや否やの御樣しに大なる障り差發るものなれば如何なる障發るとも全く御樣に預ると思ひいよ〳〵堅固に正直心を厲むが肝要也是は一應其許を敎訓する儀にして再應の儀は其許折角正直の神の道に近附ながら買人の目太無性に直限につき正直を破折に至るは全く其許の辛抱のなきことにて神の御加護のなき證據なり辛抱を强く成し堪るに於ては神の御加護ありて其許の望みの如く貨殖も出來終には大なる身上と成れるもの也依て今譬を以て此儀を言はゝ茲に貧窮な靑物渡世するものありて貧に困りたる折柄或人に敎諭せられ心底を正直に改めてれまで萊菔一荷の利上げにて家族中が日を度りてもくことなれば大抵一荷の萊菔にて一〆五百文位の利を取たる所を一荷にて五百文位の利を取奇

麗に能く洗いすゝぎ裏表の繕ひせずして賣歩行に初めの間は買人は安ひものじやと思ひながらも直限どいへども一厘も負ず然るに十日と二十日とは成らぬ辛抱仕た御蔭にて後には顔さへ出しさへすれば誰いふとなくいつもの安賣の青物屋が來たとて呼に遣らねども裏の隅からも走り出て施行を貰ふが如く買人が寄り集り忽ち一荷や二荷の菜葉は賣れて仕舞ふのみならず莖漬菜葉や香物に前々より注文を請取やうに成行一日呼歩行こともいらず我家内がうち掛つて洗ふが故に運び込さひすれば能きやうに成るゆへ一日に五荷や十荷は賣捌くゆへ利は五百文なれども十荷も賣れば五貫文の利がありて後には青物店を店開きして終には能き身上と成れるなり然るに一荷につき一〆五百文の利を貰ふと思ふと掛直を言ふがゆへに直限どぎりに日間取終日呼歩行身



心ともに勞れるのみならず一生涯呼歩行の青物屋にて果て仕舞ふなりされば此譬が其許の心底不淨病には誠に能き針灸藥なれば吃度注意して改心し正直に商賣すれば望の如く成れることを論を待たず殊更今談ずる如く不淨の爲に正直を惱まさるゝとも堪へて辛抱の强きが神の御加護なること實に相違なきことなれば辛抱に堪へがたくとも神に見放されじと心を勵まし如何なる困窮に値ふとも正直を力とすれば神鑑空しからず忽ち靈驗あるべきなれば改心して正直に商賣を勉勵し敬神の勤に戻ることを恐れ肅しむべし

## 第六　正直の人は神明の御助けを得るを譬へを以て話す

狐疑ある男進み出て曰く唯今青物賣の譬へを以て御教諭は御尤なれども彼は日用野菜物なればさもあるべきなれども

高價の物品を積蓄へ買人を待居る商人は又格別のことかと存じます併ながら正直に商賣するを以て神の御心といふ道理を得と合點がゆきますやう御示教被下たし又唯今聽聞の如く不淨の爲正直を惱まされるとも辛抱の强きが神の御加護と承りましたが然れば不淨の方にも惡神とか謂ふて神があるかと心得ますさすれば不淨の惡神も上に上がありろふに存じます故我等如きこれまで馴染の不淨故不淨の惡神の護りが强ひと正直に成られぬかと存じます此儀も御席に御示教被下たし

說師の曰く其許前席の教訓がいまだ合點のゆかざると見べたりされば再び得と合點するやうに教訓すべし抑神の道は一にして二なく所謂正直の一ッなり依て何れの貴產にても正直に商賣すれば是を神の道と謂ひ神の御意と謂ふなり譬





へば今天井より一條の繩を下しろの端へ木槌をくゝりつけ人ありて是を我方へ一尺引きてこれを放せば一尺余も向ふへ行ろの如く二尺三尺乃至一間と我方へ引てこれを放てば一間餘向ふへ至る尤我引たるよりは餘分に向ふへ至るものも又此木槌を向ふの方へ一尺押出せば一尺余我方へ歸り來り其如く二尺三尺乃至一間と向ふへれし出せば我方へ一間餘歸り來たる也されば天井より一條の繩を下げたるは神の正直の如く木槌は善惡未分の業体の如く此木槌を我方へ充分引くは高利を貪る商人の如くこれを放てば遠く向ふへ除くは神に見放されたること遠きが如く又木槌を向ふへ押出すは正直の商人利を先へ讓るが如くこれを放てば我方へ歸り來るは神の御加護身に添ふが如くされば此譬はいろはず縛わずして天然の道理なれば誰かこれを拒むものあらむや

然れば如何なる賞産にても正直に商賣成すがこれ神の御意なることと明々確々たれば是にて屈伏し疑惑を散ずべし

又不淨の爲に正直を惱されるゝとも辛抱の强きが神の御加護といふ義につき不淨の方にも定めし惡神ありて守護すべしとの尋問尤なる儀なれども直なるを神と謂ひ曲れるを鬼といふなれば不淨の守護は神と謂ふべからず惡鬼あり都て神に限らず一切萬物に善あれば必ず惡あり譬へば水は人の喉を潤し渴を止め人畜草木を長養する善水あれば又人畜を溺死させ家屋田畑を流失損害する惡水あり又火は物を和らかにし冷きを暖かにして寒を防ぐの善火あれども又人畜を燒殺し家屋を燒失する惡火あり惣して萬物の善惡枚擧するに遑あらず然るに惡鬼は誰も恐れ嫌ふべきなれども利に迷ひ不淨とも思わず漸々に馴染段々に導かれ終には災害危難に値はせて惡鬼これを看て快樂とす然れども惡鬼は幽冥のものなれば誰も惡鬼の所作を見たるものはなけれども理を窮むる所にして前顯にいふが如く水火と雖善惡邪正あり同じ五行といへども用ゐる所に隨應して清穢苦樂あり其一を謂はゝ同じ水にても神水として神前へ清器に盛られて備なへ衆人これを拜戴すると眞の神の如く又日々湯茶となりて衆人の渴を止め又雪隱の掃除に用ひられ糞汁を洗われ又木にても神の柵となりて神の如く敬れる木あり雪隱の踏板となる木もありて都て五行斯の如く用ゐる所に隨ひ清穢苦樂あるが故にこれを以て彼の惡鬼の所作を推量するに定めし人を害するを快樂とし我が身が苦しきゝへ人れも我群れへ引入むと欲するなれば聊の不淨も捨離し激烈として正直に改め永く不淨の惡鬼を祓ひ除きて清潔に敬神するが肝

要なり

## 第七　私欲を捨てゝ眞誠の敬神愛國を諭す話

愚蒙なる男進み出て曰く敬神愛國の御説教につき少し合點がゆきませぬ其譯は敬神は此御國の宗廟の御神を尊敬し奉るは至當の事件にて丁度我が先祖を敬ふが如くにて宗廟の神様は我等が親の如く我は子孫の如くなれば敬信致さば定て御加護被下業体も繁榮致すべしさりながら愛國とて國を愛念致しまして何等の福徳がござりまするや詳明に御教諭被下れば難有存じます

説師の曰くこれは其許いまだ敬神の實義がわからざる故不當の儀を尋問らるゝと覺へたり敬神愛國とは元一箇のものにして敬神を離れて愛國するにあらず愛國を離れて敬神するに非らず敬神とて神を尊敬する故に此御國を愛念するとにして格別の儀にあらず別段離れたるものに非らず然るに其許に限らず大低の人が敬神の實義を知らざる故に兎角神を敬信すれば夫だけの事件があるやうに思ひ居る譬へば人に物を進上して義理をかけ置き其れかやし返禮を待居る心もちにて御加護があるであろふ御利益を蒙りたし其外燈明神酒を献じたれば定て功徳になるであろふ抔の心底にて志し薄情野卑に堕入るこれ全く舊習惡弊の欲情に障られ敬神の御説教を聽聞しても上はすべりして神社へ參詣し献燈神酒を捧げ修覆の御手傳に賓貨を寄附し我も善事をすると思ひ人も譽むる程敬神しても其人の志ざしが間違て前段に言ふが如く神の御利益を待居るやうなる事では敬神の實義に非らず敬神の實義と言ふは此御國を開き給ふ天祖天照御大神大に萬物を生成ましまし建てさせられたる御國也ろれ

より以降此御國に生を稟けしてと糸すじを引たる如くにして我輩に至るされば天祖此御國を大成し主宰成し給ふ時の補佐の群神諸民は方今萬民の遠祖にして遠祖の血系我に至る實に神代よりの一系なれば代々く世々の先祖此御國の地味を喰ふて血道連綿と相續し我輩に至るは全くこれ天祖此御國を開建し玉ふが故なり殊更神代より我輩に至るまでの君臣の義あり此御恩言語に絶じ譬をとるに物なしされば此御恩を至誠に體認するが故眞實敬神の義立つ敬神の義たつが故に愛國の心發る譬へば貧窮の者困難に値ひし時善者あり て此人を救助け惠む其時貧窮もの悅び身に餘り難有しとて低頭平身して此御方のことあらば如何樣の事件にても御恩報しが致度と思ひつめ平常忘失ざるが如しされば敬神もろの如く天祖の莫大の御恩を心に貫徹し奉り報じやうがなき故自然とその志しが顯れ至誠に尊敬し奉るを眞實敬神と謂ひ至誠尊敬の志ざし成るがゆへ御國を愛念すること間なし愛とは愛戀の義にして物に著く義なり依て忘失れる時は愛の義たゝず故に御國の厚恩を思ひ御國の爲方を思ひ御國の稱號を穢さゝるやう暫時も忘失ざるを眞の愛國といふ斯の如く得意するを其本を知りて恩を謝する神民といひ眞の倭魂といふべし然るに前段に述るが如き神を信敬し福を待ち商賣繁榮を祈るは大意に了簡違ひにて弊習の貪欲か又己が身勝手に業体を精勉せずして神に祈り神の威力を借りて商賣繁昌を願ふは神を我身勝手に遣ふの所行とある神奚ぞ非禮を請玉ふ可からず依之商賣繁昌を願ふものは時日を惜しみ油斷なく業体精勉すれば神に祈誠ずとも繁昌し福祐のものとなる事は方今世間に例證多分あるべし然ながら今日大

陽は何れから出玉ふやいづれへ沒玉ふとも知らず夜から夜へかけて業体を精勵するは能きことなれども我身勝手の貪欲は一端は志ざしを得るといへども人たるもの天神より賦與の氣力に限りあれば氣力薄くなりては我子といへども手に合わず是迄の親の所行我儘、貪欲を見習ひ置しこと故ゑれが兒子の性質に染りたれば我儘身勝手に貨を無益な事件に遣ひ捨て終には親の舊功も空しく破産に及ぶか又年寄て若き女を寵愛し色香に迷ひ我儘身勝手の所置より家族治らず終に逼塞亡家に及ぶかなり此御國に生を稟けながら根本の大恩を知らず我儘貪欲に業体を勉强するとも迚も子孫長久の場に至らざるはこれ天理の然らしむる所なれば天祖の至大至廣の厚恩を知り奉り敬神の余りに御國を愛念し人の爲國の爲に咖の業体にても此志念の退轉せざるやう神に歎き祈誠せば神の御加護空しからず商賣繁榮子孫長久の礎となり希望すし福德の來たる事これまた天理なればもめ〳〵恩を知りて愛國の志ざしを怠惰すべからず

## 第八　正直の貧者は遂に貧困を逃れ正實愛國を知る話

卑賤なる寡進み出て曰く私は夫に別れ孩兒は先立て親族は私同樣なる貧しく今日を度るものにて便りなき我が身の上と日々我が身ながら我が身が愛想が盡きます程の不仕合者も御説教でも聽聞致しましたれば心の捌き方もあろふかと存じ聽聞致ますれば敬神愛國として呉々御教諭を承りましたが私は貧に窮し我が身さへうとましく世を厭ひますものは愛國の御説教を聽聞致しましても頓と耳に止まりませぬ何卒心の捌きがつきますやうに御教諭を願度ぞんじます

說師の曰く其許は余程惡ふ了簡違を致されたと見へるがしかし其許早う氣がついて尋問らるゝは其許の仕合じや扨其許のやうなる了簡違のものは段々心が逼く成つてくると終には淵川へ身投げするか人知れざる所にて首縊るかして死に恥を晒すのみならず其許の體は死するといへども魂は死なずして歸着安定と謂ふて行く所へ得行かず矢張死する時の念慮の如く我程便りなきものはない不仕合者じやつまらぬ者じやとてます〳〵其念慮が隆むになりて體はなけれども我身がうとましきとて苦しむものなり所以如何となれば死するときの念慮は我身がつまらぬ故世を厭ひ我身をうとましく思ひ死する故死する苦しみは元より覺悟なるゆへ苦しみの中にも此念慮を忘れず死果て仕舞へば魂ばかり成る故魂には眼もなく耳もなく口もなき故體のある時と違ひ外に



見たり聞たりすることはなき故氣がまぎれず益此念慮が烈敷なる斗りにて魂を間なく苦しめる事甚敷なり譬へば夢に獨り野の原を歩行に彼所より盜賊大勢來り光り輝く刀を拔き て威しかけ赤裸に剝ぎ取れ命からく逃げ至たる其眞先へ大なる牛狂ひ來り角に掛むとて角を振り立て既に角にて横腹を突れんとする時側なる人も覺し呉るゆへ偖ては夢にてありしと安心すれども體はべつたり汗をかき野もなく盜賊も居ず牛も居らず蒲團の中に打臥居たり斯の如く夢に魂が飛るゝ苦しみすら體に汗する如きの苦しみなれば我がでに我が魂を悼み惱ませるがゆへ其苦しみ盡る期あるべからず夢中に飛るゝすら苦しみ堪へられぬものなれども存命で居る故側より覺し呉る人あれども死て魂ばかりなれば其苦しみを助けるものなし然れば存命の内了簡違の心底を改め

ずんば天然の壽命を以て終るとも不了簡にては魂の安定すること能はず永く苦しみの盡る期あるべからず依て貧は天然の貧にして其許の不正直の招く所の貧なればこれ天命なりと諦め清貧を守るべし清貧とは貧を貧と顯はし貧に悲ぢず他人の身の上を顧みず赤裸を覆ふ衣服あらば足として食はまづきものにても腹を肥せばよしとするを清貧といふ又業体は女寡相應なる道端に脱捨ある馬の轡古草鞋の類を拾ひ又は艸刈して牛馬の食と成し紙屑ひらひしても清貧を守れば忽ち貧苦は除ぬかれ其心安穏なること福者の貨の番にて心を痛むるより遙の上等にして畢竟貧禍は貧に對する禍又禍に對して貧の名ありといへども清貧にして安心すれば貧痛むるも禍にあらず貧といへども貨を集めて貨に心をにあらずと心得颯張改心して清貧を守り相應の業体を勉勵せば今までの苦しみを翻じ忽ち安心となりて夜體を休むるが何よりの樂しみとなり斯ふいふことなら最つと早く氣がつかば宜かりしものとて國土の御恩も自から知れ眞實愛國の志しとなるもの也然るに其許の心底不正直にして貧なれども彼は出來ぬてれは見ともなひ彼のやう成る愁氣ことはいやしや女の業には力がなひとか全体若きより病身じや抔と言ひ並らべ我が心に好まぬことはこれを嫌らひ外見のいらざる見へを繕らひ氣は高くして喰らひ物を好み奢寶てん屋ものに惜氣なく小錢を遣ひ捨て或ひは人に小貨を借入ることを好み人に無心合力をいふを恥と思わず都てかやうなる不正直の心術よりして貧に窮するは天然の道理なりされば貧なれば貧に逆はざる行ひをするが正直と謂ひ貧にして貧の行ひを撰り嫌ひするは是不正直にして神明の憎み玉ふ

所なれば恐れ慎み世には土を喰ひ木の葉を喰ふ虫もあるなれば敢て専ら清貧を守り相應の業体を精勉すれば夜の明たる如く生れ變りし如く心安心にして神明の冥加にかなひ頓て國恩を知り愛國の義か眞實合點がもくものなれば速疾に改心するを急務とせよ

## 第九　愛國の眞理を諭して正直清潔を勸むる話

發明ぶりし男進み出て曰く其國に生を稟けたるもの誰か其國を愛せざるものなからんや殊に吾國は神國にして豐葦原の瑞穂の國とも細戈千足の國とも心安の國とも稱し來り萬國無双の美國なるよし依て其御國に生を稟してとなれば愛國し國恩を報せんと思ふの外なし其餘に愛國の儀につき心得可きことあらば教訓に預り度思ふなり

説師の曰く其許の言はるゝ如く國恩を知りて恩を報せむとの志ざしは至極難有き了簡にて其餘に教諭すべき事件更になくさりながら吾國を神國と人も言ふが故に我等も神國といひ來りしが神國といふ實義はいまだこれを知らず或人の曰く吾國は八百萬神等跡を垂れ給ひ永く幸ひし給ふが故に是を祭祀る依て神國といふといへども予思ふに海外萬國にも建國の祖をして崇尊祭祀するが故にこれ神なり神とすれば其國も神國なり奚ぞ吾國獨り神國といふを得んや依之聊か愚推してこれを談話せむ抑神は伸也申無不通鬼は皈也物各皈其根とされば吾御國は地球の北緯三十餘度より四十餘度に位し春秋暖和にして夏一ケ月は酷熱し冬一ケ月は寒を極め四時氣候の序を節にし五穀海外萬國に超勝して成熟し萬物繁殖の御國也これ則四面に大洋を向へて雨露に乏しからざる故なり依之五行の精氣備足して熾盛なるがもへ伸歸

の理に於て滯りなく至て速かなる姿を正直といひ其力用を清潔といひ此正直清潔の氣質を人天然に稟け得たること萬國に特超する御國なるが故神國といひ神人といふなり然るに中古以降近來に至り正直清潔の氣質衰るが故復古の御政體一新被遊るゝ御代となれば各我等も舊弊を一洗し復古の御政體を體認し愈正直清潔の志を勵まし神國の御稱號を穢し辱しめざるを以て愛國の實義とす然るに其許の言はるゝ如く豐葦原瑞穗の國細戈千足の國心安の國等の稱號ある神國なればとて最上美國と自讃するは海外の他國を毀るに當り還つて吾御國を辱しむるに至るか國は何程美國にても住む人の行跡によりて善國となり惡國となり又穢國とも鬼國とも成るもの也譬へば賤が伏屋にても取穢ひ神社を建營すれば社地の草木土砂までが尊く思ひ巍々たる佛閣といへども取除け牛羊を屠る場となれば臭しく思ふが如くされば如何程能き國にても住居の人の行跡によるが故正直清潔を相勵み神國の稱號を益遠く海外萬國に輝かすべし一人の恥辱といへども外國にては日本人と稱すれば日本の御稱號に關係し一切人にかゝわる事なれば恐れ肅みて愛國の趣意に戻ることと勿れ





## 第十　天理人道を明示して五倫の道を守らしむる話

同じ男又進み出て曰く天理の御說教を聽聞致しまするに日月星辰晝夜寒暖四時の季候等の定理を御說なされましたが此定理が人道の敎でござりますや委しきことを承り度存じます說師の曰く尤天の定理が人道の敎にして天理と人道とは二つにして一つなり天理は一切の敎の根本にして天理を知れば根本を知るといふ因て日月の盈昃星宿の列張晝夜の

旋轉る寒來り暑往き春は芽を生じ夏は繁茂し秋は收り冬は藏す等これ皆天の定理にして此天理を人道とす所以如何とならば日月の盈昃晝夜暑寒四時等の少しも違はざるを名づけて誠とす誠は一切の教の根本なりされば天理とは天は誠といふ理はことわるといふ則誠は正直の義にして理とは筋道を明らかに分つといふ義にして天理とは正直を明らかに分つといふ因て天理と人道とは一つ也人道の五倫の道が天理也五倫とは曰君臣曰父子曰兄弟曰夫婦曰朋友也此五つは唯誠を以てするを謂ふことにして君は臣下を惠むの誠を盡し臣下は君に忠義の誠を顯し父は子に慈しみ教へ子は父に孝道を盡し兄は弟を睦ましくして隔てず弟は兄へ對し敬ふて順ひ朋友には心に誠を忘れず言ばに誠を盡すなり然るに此五つの倫に違ふ時は其家齊はず其身も脩まらず夫婦睦まじからず兄弟仇敵の如く賴みにならず朋友心離散して顧るものなし此五倫は愚夫愚婦も能辨ひ知ることにして人たる者の定理の行ひなれども我儘の欲心より終に誠を忘失れ天理に違ひ戻し破産困窮の基ひとなるものなれば五倫を歎さず正しくすべし都て天地萬物の其原元は混沌未分の一理より生ず一理は則天理なれば萬物いづれも人道の教へ成らざるはなし所謂天の明らか成るを見ては我が心も天の如く正直を鏡として明らかにし善を善とし惡を惡と知り知るを知るとし知らざるを知らざるとせんことを思ひ天德の平等成るを見ては我心の偏頗なるを改め平等と成さむことを思ひ天德平等なりといへども山野河海の差別あり平等の中に差別あり差別の中に平等あるが如く平等の邊にては一切の人體は我身を分ちたる如く親しく思ひ差別の邊にては上下尊卑

の差別の禮儀を正しくするを以て平等の中の差別差別の中の平等これ眞の平等を知ることを思ひ又天地の變らぬを見ては我心も天地の如く變らぬやう物の道理を明らかにして盛衰喜憂は春夏秋冬の回ぐるが如く善事のうち續は晴天のつゞくが如く惡事のうち續は雨天のつゞくが如く盛むなりとも油斷すべからず衰へたりとて悲しむ可きにあらず喜びの内に憂ひを忘失ず憂の内に喜びあることを思ひ善惡吉凶は天地の常なりとして驚かず志ざしをうつさず心の變らざることを思ひ又天の高きを見ては我が心の卑しきを慙ぢて高上にあり度思ひ心直くして偏頗なく言に欺罔なく諂媚ひなく身の行ひ卑賤しきことなく萬物を損害ず穢がさず言葉和らかにして人をなつけ人の心を悼めず恂まさず知惠を明らかにして人を敎へ心を廣くして豎かならしめ善を愛して



もかたよらず惡を厭ふとも憎まず斯の如く高上なる心にならんことを思ひ又地の厚くして千草萬木を生長するを見ては我が心も人に眞實を厚ふして人を育て善に導くことを思ひ大地の穢れ不淨も厭はざるが如く我に人如何程難面くあたり己に叛くとも憎まず永く萬人に信を失わざるやうあり度ことを思ひ又水を見ても我心清き事水の如く然も讓りて高ぶらず僞かざる心なくして誠あり天然の樂に任せて强ひて貪らず自然の福德を樂しんで利養を求めず樂を求むれども執着する心なく譽を求むれどもかざる心なく稱れども諂わず好めども貪らず恥をかくせども欺わらず善を顯はせども無事をかざらず苦といへども强ひて免る心なく人の不善といへども洗い淸むるが如く敎諭せむことを思ひ又風の吹くを見ても我が心も執着不淨の障りなき事風の如く人情に通

して滞りなく萬事に達して其理を知り輕くして速かに千變萬化自在にして心の不淨の雲を拂わんと風の如くせむと思ひ又雲の雨を含むを見ては我が心も慈くしみを含むと雲の雨を含むが如くあらん事を思ひ雨の草木を潤すを見ては我も人を悦ばしむることと雨の草木を潤すが如くあらんと思ひ月を見ては我心清く涼しきことを思ひ又月の次第に光りを増を見ては我も漸々智恵を増さんことを思ひ花を見ては我が心も文ありて優美しき事花の如くあらんことを思ひ松を見ては我が心かわらざる事松の葉の四季に色を變へざるが如く然も寒熱に忍力を顯すことを思ひ竹を見ては我が心も正直にしてくるひなく節の序ありて然も清き色を顯す事を思ひ梅を見ては我心清く薫り文あり雪に値ひ嵐にあへども健やかなるが如きを思ひ菊を見ても寂しき秋といへども

もあやありて榮ふるが如く其外一切の草木玉石砂泥といへども己々に勝れたる所あり人道の教へならざるはなし是則原元天より生じたるものにして一々に其理を具足するがゆへ一切の教は天理を根本とするといふ依之天理に順なるを是を道と謂ひ道を明すを教といひ教に隨ふを行といひ行に因りて成るこれを德といふこれに因て天理に恰ふを以て正道とす依て五倫の道を正しくすれば天理を明らかにすることにして二つにして一なりと得意します〳〵堅固に五倫を守ること肝要とすべし

## 第十一　人は萬物の靈長たる義説て五倫を正しくするを眞實の樂とする話

正直らしき男進み出て曰く人は萬物の靈たるよし承わるといへども萬物の靈たる譯けを知らずして人に語るも不都合

な儀なれば委しくうけたまわり度存じます

説師の曰くこれは誠に難有事件を尋問らることかな誰も人は萬物の靈なりと言ばには謂ふとゝいへども其義理を知る人少し實に萬物の靈たる事を知れば百千の書籍を讀むに超勝るべしされば人は萬物の靈と謂ふことは人は天地を以て心性とし人は天地を以て身體とし人は天地の柱にして人は天地の眼目なりと謂ふ義なり所以如何となれば天は尊しといへども人に非ざれば天の德も顯れず地厚大なりといへども人に非ざれば地の德を顯すものなし日月星宿山野河海も人にあらざれば其德も顯れず千草萬木も人によりて德を顯し金銀珠玉も人にあらざれば光を顯すことなく萬物の上にも無量の色あり無量の形ちあり無量の香ひあり無量の聲あり無量の味あり無量の觸あり無量の道理あり千差萬別の次第



法則あり是皆人に非ざれば知るものなく譽むるものなく樂しむものなく又人能く火を自在に出し闇を除きものを燒き毒草を變じて藥と成し石を轉むじて玉となし一を變じて千萬と成し有を變じて無と成し無を變じて有となす實に不可思議自在の働きを備へ一人に無量の知惠をうなへ無量の德を備へて萬物の色を見分け聲を知り香を分ち味を區別して無量の言葉を出し天地無量の福德を顯し無量の功能をたすけ普く働きを備へて一人の功能が無量の人に通じ無量の人の功能が一人に通ず實に斯の如く知るが人は萬物の靈たることを知ると謂ふされば人たる尊き人體を稟なから天理人道を知らず五倫を敎す輩は實に人面獸心と謂ふべし是しかしながら五倫を疎に思ふより高大なる味ひあるを知らずこれを正しくして樂しむことを知らざる故なり譬へば犬猫の

眼には櫻花の潤はしく文ある色を見ても枯草を見ても同じやうに見るもへ樂しみを知らざるが如し人は萬物の靈たるがもへ五倫の道に於ても君臣は忠惠を盡さむこと樂しみ父子は孝慈を盡すこと樂しみ兄弟は親睦を盡すことを樂しみ夫婦は和順を盡さむことを樂しみ朋友には誠信を盡さむことを樂しむ然るに天理人道を知らざるものは五倫の道を樂しまざるがもへ我儘の欲心增長して終に人面にして獸心となり生ながら畜生と成ること歎かはし敢てことに非らずや都て人は萬物の靈たる事を知らざる者は世俗の樂しみを樂しみとする故或は心を迷はし身を損なひ病を求め人を苦しましめて樂しむ故樂しみにつき腹をたて愚痴を發し恥をかき魂をいためて終には苦しみとなり樂しみ盡き果て又貧賤のものは樂しみを成すことを得ず然るに萬物の靈たる義理を知る人の





樂しみは眼前に滿ちて盡る期なかるべしされば其樂しみは造物主の御恩を知る樂しみにて春は四方の山々霞靄き雪解の下より萌出る齊若菜や梅が香に鶯囀り雲雀鳴く野邊は齊菁蒲公英碎米花に小蝶舞ひ狂ひ樹々の芽生への山々は新樹文あり潤はしき椿櫻桃柳の糸の戯く春景色一刻千金の詠めもうかゝと早夏となり山は若葉に木下闇鳴く郭公燕子花牡丹芍藥蟹粟の花野の邊に夏草生ひ茂る螢飛ぶ夏川に風蕭り早苗とりや夕涼いつしか蟬鳴き秋近く初嵐に霧晴れて蘭蕣に露の玉を敷き桔梗の色や女郎花萩薄尾花咲下に虫の音蚯蚓鳴き待宵の月にわたれる初厂や鶉鳴野邊の草は枯かる山は紅葉の錦して色とりゝの菊の花今を盛りの秋暮て寂しき碓音高く窓をうつ初時雨に冬を知り小春の日向短くして落葉重なる霜柱凩しに冴わたる衛の聲や鳴のたつ澤

邊には薄氷冬枯寒き萊菔引枇杷山茶花の華盛り水仙寒菊冬牡丹詠めも盡ぬ雪景色白妙清き銀世界炭割る音も冬籠の退屈になる時分には原の春となり春が過れば夏となり斯の如く車の轉るが如く樂しみの盡る期なく貨を以て買ふにあらざれば一錢も費やさず心に任せて恣に詠め樂しむとも誰も尤むるものなくひねもす樂しめども身に災いなく貧賤にしても得やすく商工の暇なき業体の中に樂しみて業を妨げず園丁の差圖もいらず掃除に手間もかけず天地の造物主と樂しみを同じふし福貴驕樂に遙にまさり造物主の大恩を知るものなり然るに天理を知らざる者は萬物の靈たる我身を知らずして此無盡なる樂しみあるを知らず苦を求めて樂しみとす神明笑ゞ悼み給はざらんや速かに萬物の靈たることを得意して五倫の道を正しくするを樂しむ事を欲せよ



## 第十二　幽冥照鑒する處あり必ず五倫の道を正しくすべき話

愚直なる男進み出て曰く天道様は能看通しにて人何程悪事を隠しても能く御存じのよし承わり居りますがこれも天理とか謂ふて理屈があることなるや委しく御示しに預れば吃度心得に成りますやへ此義御説得被下ばかたじけなく存じます

説師の曰く茫々たる天道我等の計り知る所に非らずしかし理を推量して謂はゞ天は一切の萬物を生々の德あるのみにて別に身體あり眼ありて世界を主宰するには非らざるべし唯水火木金土の五行の精氣別れ〳〵に顯れ出でゝ日月上にあり星辰布列し山川江海下に列なり世界成就して萬物こゝに生ず依之主宰を立られて國を治め給ふに顯界といふて人

の眼の見へ屆く境界には人主あり幽冥界といふて顯界を離れずして人の眼の屆かぬ所には鬼神あり俱にこれ天に代りて萬物を司どり能く賞罰を成し給ふ故に人主を天子樣と稱し奉るこれ天職なり依之百官諸局群僚を立てさせられ萬民の塗炭の苦を救はせ玉わんとて震襟を惱せ給ふ其御意を體認して諸局の吏員晝夜勉勵して顯露の善惡は賞罰正しく成し給ふといへども萬民の隱惡とて心中の惡毒は知れず又幽闇の密室にて犯す惡事は顯れにくしといへども是等の惡事は人の眼は屆かす音もせず匂ひもせずといへども幽冥界の神明はこれを能く照覽成し給ふ假令十重二十重の土藏の中にても照鑒成し給ふことと自在なり故に朝廷八百萬神を尊敬し給ふ事の深重なるは天地の化育を助け贊輔佐翼の功を成し兼ては顯界の眼の屆かざる所の萬民の隱惡を罰し給ふ





を以て敬神尊崇し玉ふなりされば幽冥の神明萬民の隱惡を如何して照覽し玉ふと云はゞ幽冥の義恐れありといへども聊譬を以てこれを示さば一室の內の眞中に行燈を居へ片方は行燈を明け火を明るくし片方は行燈の尻裏へ風呂敷やうのものをうちかけ闇く成し兩方に人居るに行燈の明るき方より闇き方を見るに一向人ありとも見へず又闇き方より明るき方を見るに人の顏の痘痕の數腦までもあり〳〵と見へわれるが如く明るき方は卽顯界の如くにて幽冥は見へざるが如く闇き方は幽冥界の如くにて顯界は明らかに見へるが如し依之如何なる密室の內にて造る惡にても人の心中に萌す惡念にても恐れ肅み幽冥の神明の照覽を慚愧入べし前顯に述るが如く顯界の力の及ばざる所人の眼の屆かざる所を幽冥の神明照覽して顯界の賞罰を助け給ふは全く天に代り

て司り給ふが故これを以て天は看通しと謂ふことなりされば天理は生々の德のみありて賞罰の義は司どらせ給わずといへども天に日月あり是鬼神の中の最靈尊大なる物にして冷熱の現前たるを以て推量せば是水火の二精氣なることは疑ふべからずさりながら其中に極めて靈神在しますことは論を待たず恐れ敬ふべきの至りなり其外山林河海の靈神國土守護の善神ましますことは是また疑貳べからずされば顯界の吏員の如く幽冥にも大國主神を司として多員の冥官の神あるべし然れば實に心中の咿、の惡念にても恐るべきことなれば天理人道を明らかにして五倫の道を正しくするを樂しみとすれば一事一切事にて自然と萬端善道に到るなればこの心のまま〳〵進み永く背戻すること勿れ

第十三　惡風弊習の妄誕を破却する話





邪慢らしき男進み出て曰く前席の教諭に天は唯生々の德のみのよし承るといへども眼前日月五星天にありて就中金星土星は運命を司り木星は天神火星は軍神水星は商神といふて古來より衆人皆尊信すされば禍福利害を司どり給へり奚ぞ生々の德のみと謂ふべからず又十重二十重の密室の内にても人の心中の隱惡にても幽冥の神明照覽成し給ふと謂ふは神明如何して照覽し玉ふや甚不思議の事件に思われる何卒得心致すやう說得被下ばかたじけなく存じます

說師の曰く前席に說く天理は生々の德のみのよしを其許拒まんと欲して往古より言ひ傳ふる所の五星の禍福利害を司るよしを以て募るといへども是舊弊の者の謂ふことにして論するに足らずといへども今ろの弊習を一洗すべし吾御國も近來天門發明する人追々開け既に大陽はいつも東方より

出現すると見來りたるも大陽は少しも動かずして此世界の地球が廻ると窮理す然れば以往とは主客の違ひとなりぬ又世界の地球は大陽の光輝をうけて廻る游星の内にて日月五星と等しき所の天體なりされば同じ天體なれば奚ぞ五星能く地球上の人民を賞罰するとあらんや若是を司どると謂はゝ吾地球も又彼五星中の物類を賞罰すべし豈此理あらんや往昔より五星の禍福生殺を司どる論は婦女子を誰かす妄説にして執るに足らず又十重二十重の密室の内にて造る悪事及び人の心中の悪念萌すも幽冥の神明これを照覽まします事と天理自然の道理にて敢て疑貳すべからず然るに其許顯界の我が分限を以てこれを拒むは甚しき不智なり犬猫野狐の類は夜といへども遠く見るの妙あり魚は數萬の子を一時に孕む德あり鳥は雲井遙に天に登るの神通あり虫は





親なくして化生するの不思議あり是等は畢竟眼前に見て居るが故に何とも思わずといへども若見ず知らざる時はこれ等れも定て疑ふべし況や幽冥の事件は顯界の見聞することの能はざるもへ疑ふといへども實に恐るべきことなり幽冥の沙汰我等風情の量る所に非らざれども其許の邪慢を挫がんが爲理を以てこれを謂はゝ人ありて心中に悪念萌す時出入の息呼せざると思ふや又密室内とても悪事を犯すとき息呼せざると言はゝ論を止むべし息呼を止むれば絶命に及ぶ奚ぞ其謂あらんやされば天地の間には理氣の二箇を以て萬物を造化す人も理氣の二箇に因りて生々息まざる所のものなり氣といへども原元理ありての氣にしてつゝまり未發の中より一つの理といふものが備わりてそれより氣の流動するなれば人の念慮所作も其如く人は萬物の靈にして天地の一

切の理を備ふるが故善縁に値へば善の理より善の氣を萌し所作に顯われ悪縁に値へば悪の理より悪の氣を萌し所作に顯るゝものなりされば人の氣と世界に滿々たる空氣と一體にして別段變しものに非ず所以如何とならば世界の空氣の出入によりて生を保がもへ也依之如何なる所にても空氣の通ふ所は幽冥の神明照覽ましますは此理にして是天理なれば假令聊の悪念も慚愧入恐れ肅み人道に違戻せざるやう諸善を奉行せよ

## 第十四　顯界の人五倫道を守れば幽冥の神意に協ひ威力倍増し給ふの話

物識らしき男進み出て曰く幽冥の神明天に代て主宰し給ふと唯今承る若神明斯の如くなれば善人に必ず福ひし悪人を必ず罰し寸善寸悪といへども其應報嚴重にあるべく筈なれども伯夷叔齊の首陽に飢死し顔淵の貧にして夭なる孔子孟子一生用ひられずして死し盗跖の富にして壽なる類ひの如く吾御國にもこれ等に相似る人ありて善人の殃をうけ悪人の福を得ること少からず何故幽冥の神明斯の如く不明不正なるや往古の聖賢すら尚斯の如くなれば我等如きものの善を成すとも何程のことかあらん依之神道の至誠正直も佛道の因果應報も儒道の天命の論も通せざる所あるに似たり最も疑貳すべき事なれば此義を明らかに説得を冀がひたくぞんじます

説師の曰此事件幽冥の秘奥にして奚ぞ我等如きのもの容易に知る所に非らずさりながら理を推して愚意を述べて專ら賢哲の評を待つ夫玄々たる幽冥の神明善を賞し悪を罰すといへども或時は至當に非ざることもありなむ又至正の神明

といへども力の及ばざる所心の屈かざることもありぬべしこれ如何とならば幽冥の神明といへども顯界の人の心の清濁によりて威力增減すと思はるゝ顯界の人五倫の道を正しくし人々の心正直ならば幽冥の神明善事を嘗め給ふて威力倍增し擁護の勢力隆盛ならん若顯界の人五倫の道に違戻するもの多く人々の心不淨なれば幽冥の惡鬼威力を增し幽冥の至正の神明といへども惡鬼の勢力に暫らく隔てられて力の及ばざる所心のとゝかざる事もありと思ふこれ顯界に例して知る可きなり所謂人亂則鬼神亂といふが如し例せば往古平清盛惡神の守護によりて官太政大臣に昇進し國員の勢大に任かせ驕奢を極む然れども小松內府五倫を正しくし給ふもへか善神も猶豫仕給ふて暫く平家勢大を失はずといへども內府卒去し給ひ善神捨離し給へば惡鬼便りを得てます

ます清盛を驕奢らせ震襟を惱せ奉るに至るがもへ幽冥の善神憤發成し給ふて惡神を討ち懲し守護を止め給ふと思われて忽ち清盛難病をうけて死し一門悉く西海に入水して亡ぶ是幽冥の善神罰し給ふ所と覺もさりながら頼朝武家の棟梁となりて五倫の道漸々に廢し幽冥の惡鬼威力を得て北條時政の邪惡を助け和田畠山の仁忠も幽冥の善神威力衰へ給ふかこれを救ふこと能はざると見へて終には奸邪の爲に亡ぶ就中義時に至りて兇惡父に超勝して惡神威力ます〳〵熾盛となり國に希有の災害を發し終に義時の惡逆主上を惱し奉り恐多くも遠く遐陬の島へ遷し奉る武家權勢斯の如く五倫の道を失ふこれを以て世の衆庶を推量するに五倫の道を失ふもの定て多かるべしと覺も義時の惡逆無道を以て清盛の時勢を考ふれば清盛政を執り惡逆無道といへどもいま

だ日浅くして萬民清盛の悪逆を憎み此弊風下衆庶に移らず
して五倫の道を失はざるもの多かりしが又小松内府の徳化
遺りしと見へて幽冥の善神現當に罰し給ふ然るに義時悪逆
無道にして下衆庶も五倫の道を失ふもの多かりしもへ幽冥
の善神善事を嘗め給はざるか微力にして如何ともすること
能はざると覺も諺にいふ凡夫盛なれば神祟らずとやら謂ふ
が如く悪人盛なれば幽冥の善神も急には及びがたき邊もあ
るべきか幸にして泰時時頼の智仁家名を失なはず兵權を執
るといへども高時に至り冥の解るが如く大木の倒れるが如
く一時に滅亡に及ぶ是顯界に楠公等の如き古今獨歩道の正
しき御方出世なれば幽冥の善神色を直し威力倍増し給ふが
もへ應護の力強盛とならせ給ふと覺も餘は繁きを恐れてこ
れを略すされば伯夷叔齊の首陽山に飢死せしは殷の紂王無



道の荷擔のすじあるもへ飢死は是天理なりまた孔子孟子生
涯に用ひられざるは啻としたる悪國の確證にして善國なれ
ば奚ぞ用ひざらんや依て孔子孟子一生用ひられぬがこれ亦
天理なり其外顔淵の貧にして天なる盗妬の富にして長壽な
る等はこれを例して知るべしされば人の心こそ大切なるも
のはなし人五倫の道を正しくするもの多き時は幽冥の神明
威力倍増して國に不祥災害なく萬民ろの業を安んずこれ善
神の應護の力強き故なり然るに人五倫を敷すもの多き時は
幽冥の悪鬼人の悪邪の氣を嘗めて威力をまし國に厄難を發
し萬民これに惱亂す悪鬼これを快樂とす此時幽冥の至正の
善神も五倫正道の善味を嘗玉はざるがもへ威力衰へ如何と
もすること能はざるべし實に人の心は大切にして心剛則神
守強といふて神明は人の氣によりて用を成し給ふと思はる

るれに依て天理に恰ふ所の五倫の道を正しくすれば幽冥の善神威力倍増し給ふて國に不祥の災害なく善人に福し惡人を必らず罰し給ふこと假令寸善寸惡といへども賞罰正しきこと疑ひなかるべきかされば人たるもの五倫の道を至誠に正しくすれば恐多くも是幽冥の善神の御威德勢力を助け率る事件なれば努々恐れ肅みて五倫の道に違戻すべからず然るに人は五倫の道は如何なるものも辨へ知る所にして至て易行なるが故に疎かに思ふより誠を失のふに至るといへども實に大切の道にして人たる者五倫の外に求む可き道なし修行すべき法なきといへども浮薄の輩は兎角目なれぬと六ッか敷行ひには尊信して無上の道のやうに思ふは所謂新物喰ひといふものにして至て野鼻の根性なり此等の輩能く能考へ思慮して見るべし君に臣たる道を盡さず給金の大小を論じ手足身体は我がものとのみ思ひ不精を働き甚しきに至りては私の事を思ひ主人あることを忘れる形となり又親たるものに心配をかけ安心させざるのみならず年寄の母を婢女の如く遣ひ養ふといへども敬せずして牛馬を養ふが如く果ては厄介ものゝやうに思ひ又夫たるもの夫の道を盡さず我儘にして婦を芥の如く見下し適々婦これを諫め拒みて道理を說けば其理につまれば夫の威光を以て打擲に及び酒の爲に妻子を忘れろれからろれへ呑歩行金貨の工面見苦敷耻なる事件には婦を追遣ひ又婦たるもの夫の訥口少言なるを侮り我獨賢がり萬端につき夫を差除け出しやばり適々夫道理を說くともこれを拒み言ひ募りて無体に言ひ勝むと欲し夫を鹿略に思ひ禮節を失ふ又兄弟は互に我儘にして睦しからず實に兄弟は他人の始りとの諺を眞實なりと心得違を

致し兄は弟を見ること怨の如く弟は兄を見ること敵の如し兄は弟の困窮を救はず弟は兄の難澁を顧みず又朋友の交りは唯呑喰ひ又浮薄のことの交わりにして甚しきに至りては誑惑して利を貪り己纔の利を貪と欲して世事に疎き長然友を唆かし酒色に導き遊藝懶惰無賴薄情を以てまじはる都て五倫の道は斯の如く違戻して詩を作り歌をよみ神佛を信じ眞言を操り經陀羅を讀むとも不都合なものにて獵師が袈裟を着し糞桶に御幣の如く神佛奚ぞ感應あるべからず若あり と云はゝ惡鬼魔佛ならん論ずるに足らずされば人間の上にては五倫の道を無上最第一とすよつて餘道をかへりみず五倫の道を正しくすることを快樂とすべしさりながら五倫の道を正しくするがもへ祈らずとても神は護らんなぞと思ひ神明の守護を祈願せざるものは智者といふべからず人道を正しくして神明を敬奉せずんばあるべからず神明の助けをうけ奉ることは神明の靈著きは人の見ざる所聞ざる所を知し召せばなり依て幽冥の神明天に代りて主宰し給ふて賞罰嚴重なること全く顯界の萬民五倫の道を正しくするにあれば萬民己々の家内の長たるもの此理を得意して家族にこれを教へて永く五倫を敷すこと勿れ

## 第十五　難者を諭して聖上の大恩を知らしめる話

偏屈片意地なる老婆進み出て曰く唯今御說教を聽聞致しまするれば皇上さまは此御國を主宰らせ給ふて萬民の塗炭の苦を救はんとて震襟を惱せ給ふ由をくれ〳〵御說なされて皇上樣の大恩を知るべきよしを御訓しに預りましたがられは皇上樣の太切なる事は此御國にては此上もなき御方なれば聊麁略には思ひませぬが私のやうな生過た因果な婆々の身

にとりては此御國は愁ひ悲しひ所にて頓と我が思ふやうにはならずして大事のかゝり子や嫁は先立て孫を我が手で育て上げましたが並や大抵の事ではない其上鼻が鳴り頭痛がすると言ひますと又逆さまごとに成りはせぬかと案じられます故どふか早う此苦の世界を遁れまして未來は此世界のやうなる憂目のなき自由自在な樂が致される幽界へ行ふと存じますろれも〻へ何程此御國は結構な國じや皇上様の御恩を思へと仰られても我等の身にとりては愁ひ悲しひ國土と存じます故矢張皇上様より神様の方が太切に思われますしかし此御國も愁ひ悲しひことの憂目がなく苦のなき樂な國ならば結構と存じます此婆〻も若きより種々く苦勞致しましたればまんざらすじの通らぬ事は思ひも致しませぬ此義如何にでざります御示しに預度ぞんじます



説師の曰成程其許は神教信仰の人と思はるゝが神道は余程能きなれども其許の聽聞の仕やうが悪いか又は其許に限らず兎角老婆の仕癖として我儘片意地が癖のやうに成りて有るも〻へ有難道の教を聞ても味噌漉耳といふて肝心の可き眞味は抜けて仕舞ひ糟ばかり殘りて耳に止る故何も役に立ぬろれ故前段のやうなる狼狽たことを言はるゝもの也都て年寄てから教堂へ參詣して講談説教を聞ても何の益にもならぬ事にて人は壯年の内に教師に値ふて人道の肝心を聞得て根情を直し善に基き身を修め家を齊ふが道の本意なり然るに壯年より教を聞き得ず老年に至り我儘の根情癖のやうに成りてから迚も直ることではないされば老婆の癖として若き夫婦へ口やかましくさし出るが惱さく思ふて教堂へ參り其外參詣ごとを勧めて内を出すやうにすれば夫が又癖と成り

て後には同じ友に誘われて教堂へはまり込むやうに成行教堂にても定参詣の減らぬやうとて執持ぶりをする故根情は、一向に直らず邂内に居れば例のさし出口にてやかましき故彌内にれらざるやう寺参を勧める故何の益にもならぬ事なり因之年寄老婆程内に居て貰はねばならぬ人にて若夫婦の行屆かざるを見集め補ひ無益の事の無きやうに若者と年寄とは了簡が違ふと思ひ貌にも出さず言葉にも出さずぶつ〳〵と補ふて遣れば第一嫁の教へともなり實に年寄は重寶成るものとて家内が悦べども中には我が内のことは一向掛はず他人の口車に乗せられて氣兼をして子守したり洗濯を手傳ふたり身を皮にする老婆も有るものにして是等の老婆の癖習は迚も直る事難かるべししかしながら其許は又格別にて掛り子を先立しより種々の憂目に値ひて世を厭ひ早く幽界





に登り神の列に入らんとするは隨分尤のことなれども是迄に難有神理のある處を聞得られざる失よりかやうに狼狽たる事を言ふて皇上の大恩を蔑如するに至るとも此世界は堪忍せねばならぬ國にて世間も盛なれば衰へ衰へば又盛ともなり色々遷り變り流れ行くが世界の有様元より極り切てある事なれども執著よりして我が勝手に愁ひ悲しき苦を拵らへ世界の諍の堪忍に背くといへども何れにしても堪忍せねばならぬ國土也其證據には寒夜には火桶を懐き抱へて寒を堪へ忍び暑には扇團ろの外涼風を求めて堪へ忍び雨降雪降風吹等に隨ひ夫々の物を用ひて堪へ忍ぶ況や生者必滅とて生ある者は必ず滅する悲しさも會者定離とて會ものは定りて離る斷りは此世の中の有様なれば是等も堪へ忍ぶべきが世の習ひなり然るに夫に別れ妻に離れ親を殘して子を先立

て或は盛なるものが衰へ富者が俄に貧窮となり是等の儘ならぬすじより大切なる此御國を嫌ひ苦の世界なぞゝ雑言し生を此御國に受て地味を食して成長する事全く皇上の大恩なるを知らざるは執着心より發る所の我儘なり如何となればは夏の焚るゝが如き堪がたき暑さ冬の裂くが如き寒さの苦しみ又雨降雪降には傘下駄草鞋などを用ひて歩行すれども實に惱さき恐びがたき苦しみなり然るに是等の苦に因りて此御國を厭ひ嫌らふものの決してなし是如何ゝとならば暑寒雨雪は此世界のあたりまへの事と得心して居る故左のみ苦とも思はざる也然れば生者必滅會者定離も同じく此世界のあたりまひの事なるを我得手勝手にて百迄も生るやうに思ふて何時も變らぬ事のやうに思ふはこれ執著心より發る我儘なりされば堪へ難き暑寒の苦しみ雨降雪降の惱さき苦には



還て世界の有様と能諦め老少不定の生者必滅には執著より して世を厭ひ恨みて苦の世界と思ふは我儘の癖に非らずや因て其我儘な根情が直らぬ内は假令東方にもせよ西方にもせよ高天原といふ國へ至れば定めて神様が居まして猥りがましき事はなく隨分嚴重なるべし然れば其許のやうなる我儘者は迚も辛抱が成らず直に辟に成るもの也如何となれば此義を譬諭を以て示さば極貧窮の家に成長して萬端不自由なる身が俄かに富家の客人となりて太切にせられ小便に行ても侍婢女童が介添來たり食すれば慇懃に給事致し呉るもへ骨もせゝられず外へ出歩行ば小者丁稚が附添ひ來る故買喰ひも出來ず平生奇麗なる座敷に安座すれども手枕で寐はらばふ事もならず百味の饗應にも増されども直箸で喰ふやうにもあらず窮窟にて已前の貧窮の身分にて

萬事不自由といへども我儘氣儘に身を持居りし時が慕はしくなりて珍膳珍味も美からず莊嚴美麗の座敷も針の莚に座するが如く辭に成りて樂しからざるものなり此譬諭の如く今迄我儘氣隨に暮したる者が幽界へ行て見れば神樣も威儀嚴重にして行儀正しく一文不通の其許へ神樣が何角六か敷事を敎へくだされるでもあろふされば其許のやうな我儘者は何程國は結構でも窮窟にて儘にならず迚も辛抱がならぬ故、折角幽界へ行ても矢張此世界が戀しくなるものなりこれ一應其許の意に隨ふて說くといへども矢張幽界にも我儘者は居られぬものなり此御國に生を稟たれば此世界が本土にして其許の身體と魂とを備へて生れるやうに成し被下たは此御國の木火土金水の性氣の神々樣の御力なり然れば此世界が本土にして神々樣が我身を拵らへ被下たる本土を嫌らひ徒づらに幽界を慕ふは甚しき狠狽者にあらずや譬諭ば其許我子を育て食物衣類等萬端につき意を悼めて成人の後其許を嫌ふてと甚敷して他家の一度も見ぬ人を慕ふが如くれ不孝不義と謂ふ可しされば此御國が本國土にして恩土なれば前段にも言ふが如く一切の事件に堪忍せねばならぬ國土なれば一切の事に能く諦らめ堪忍すべし又苦を厭ひ樂を欣ふは迷ひにして生死苦樂は本よりあるに極りたる事なれば今更驚き歎く可きにあらずされば斯の如く得意して我儘の根情を改め堪忍を表とすれば今迄愁ひ悲しひ苦の世界と思ひしも忽ち大切なる御國と了達して我が爲の本土の御國なれば是を知し召す皇上は我が爲には命の主君にして我が爲に御加護成し被下ばこれ我が父母なり主親の大恩ましますに皇上は實に生れぬ前の神樣の御恩にも遙かに超勝して難有

ことなれども我慢偏執の癖を棄てざれば此實際を得意する事いたし難きがもへ深く思惟して皇上の大恩を知り朝旨を遵奉することを欲せよ

## 第十六　皇上の御心を体認して之れを所行なせば神明の御心に協ふ話

長然さふなる女進み出て曰唯今老婆への御教化にて世界といふ事が粗譯りまして何事も堪忍して世を度らねばならぬとの由又生死苦樂も今更のことにあらず元よりある此世の有様との義御教訓は御尤に存じますれども同じ元よりある苦樂ならば今世間に貧福の區別は段々に有りて下々に至りては貧に生涯を苦しむものでざります故これを思へば私は來世は能き富かの家へ生れ度存じます其譯は今世間の貧者も富者も同じく皇上の御恩を蒙り奉る故富者と生れば御





恩もしり易くろれもへいかなる法を修行致しますれば富家へ生れますや是等の事件は矢張神さまへ祈誓するが道理かと存じます此義御示しに預りたし

説師の曰尤なる尋問なれども來世の事を今から望まれても頓と譯からぬことにて其許の意が時々折々に變るもへ望みを立てもむだ事也これ如何となればその許れとなしさふに見へても何ぞ角ぞ我心に協ぬことがあると柔和なれとなしき姿は余所へやら行て仕舞ふてなひでもなき事に腹を立たり又あの品が欲ひと思ふと其口調を調ふ迄は魂を悼め暫時も忘れず又旦那殿が歸りが晩ひと案事るは附たりにて疑ふて小者に根堀り葉堀り尋問て悋氣を仕たり又何でもなき事を氣にかけろれからろれへ段々深く尻の仕舞ひ迄物案事を仕たり又是非を糺問さず人を疑ふたり余所の事件を羨み嫉たり

五年も十年も前に損を仕たる事を思ひ出し取返しのならぬ事をくひ〳〵と悔たり過て仕舞た事を言ひ出して腹を立たり金があうたらこふも仕様ものと出來もせぬ思案を仕たり何所ぞから貨持のてけ込みが來ぬてとかとてつても附ぬ事を思ふたり都てかやうなる種々の心が發る故來世は何程可き富家へ生れ度も來世は兎も角も今世にてれとなしき柔和な人間の心は必竟機嫌の能き間丈の事にて何角事が間違か我心に協ぬことがあるか又欲ひか惜ひか憎ひ可愛の縁によりて腹を立てたり愚痴を發したり一日の内に何遍となく心が變りて佛道で謂ふ地獄餓鬼畜生の心となる其證據を明さば我が心に協ぬことありて不怪腹を立る時は滿面朱を洒くが如く大熱發す是焦熱地獄の火焔にあらずや又腹の立つ時顔の色青ざめ齒の根も合はずがち〳〵震ふはこれ八寒地獄





のあり樣に非らずや又あるが上にも欲がかて飽き足らざる心は是餓鬼にあらずや又餓鬼は子を喰ふと謂ふは最愛の子を苦界に沈むるをいふ去ながら方今御仁恤の御政體に此弊を除るゝ事を得たり又愚痴の執心善惡邪正を辨へざるは畜生に異ならずや斯の如く纔か一日の内に何遍となく意が遷り變り五倫至誠の人間の心は暫時にて惡念は多事の間なれば此會計にても知るべき事にて一心不亂にて神を祈り種々口先で言を申し立てゝ心の煩惱を退治し貪瞋痴を伏忍するには誠に善きとなれども人の根情にては其功能も顯れず諭へば酒は人を醉しめ鬱散するものなれども水一升の内へ酒少々入れても一向酒の功能顯れず又米は人の壽命を養ふ可き物なれども飢たる人に四五粒の米を煎じ用ひても其驗なく死に至るが如く此諭の如く一日の内に五倫至

誠の柔和なる人間の心は酒の如く惡念妄想は水の如く貪瞋痴の三毒心は飢たる人の如くされば來世は富家へ生れたき抔の了簡はこれ苦を厭ひ樂を欣ふの心なれば大抵の人此轍を出でざるものにして富家へ生れ來ろふな事か自ら能々勘考して見るべし自ら其許の無理非道の望みなること明らかに合點すべし扨再應實義をいへば吾御國の皇上の御志しを摸範として修行の法を建立するを第一とすこれ如何となれば皇上の御志しは天の大陽の平等に照し給ふが如く清きも穢も分け隔てなく北邊西陲といへども一視同心にして最貧偏頗なく平等の慈悲を垂れ給ふ事雨の一切の草木を潤すが如しこれ神といへども此の御志しに變る事なし然れば皇上斯の如き御志しをなを〳〵御勉勵在ましして震襟を惱せ給ふて萬民の塗炭の苦を救わんとの思召を深く體認し此御志し





を受け繼ぎ貧福に貪著せず又來世は人間に成ろふが畜生に生れふが何になりてもよし唯國土萬民の爲に利益に成りたしと志しを立れば一切に怖れなきこと風の空中にありて障りなきが如しされば假令猫の前の鼠となりて猫の腹を肥し鷹の前の雛子となりて鷹の食となるとも或は牛馬と成りて重きを脊負ふて人間を救ひ又大身の魚となりて人間の腹を飽し其外の畜身となりても國益民益とならん事を思ひ況や幸に人間に生を稟れば知識を開き天地國用を達し萬民の爲に利益あらん事を願ふべきなりされば斯の如き得意せは假令身は畜身にても心は神なり況や人身れや因て來世の事に一向貪著せずして唯今日を大切として柔和正直にして自他彼此の差別せず平等の志を發すべし併ながら初心より生涯の永き間人間の志しを失はじと思へば還て怠慢に至るべし

因て其日一日の辛抱と心得一日〳〵と大切に心掛け送り行けばいつしか癖となりて人道至誠の道も修行し易くなるもの也されば皇上の御志しを受け繼ぎ苦を厭はず樂を欣わず國土萬民の有益を思ふことと造次顚沛にも忘するべからず然るに吾皇民として温に着し美味を喰ひて飽き足らず天地の産物たる地味魚鳥等の衆生味を無益に費し生涯榮花を極むといへども國土萬民に一分の功なき輩は實に牛馬鷄犬にも劣り及ばざること遥かなり因て是等に相似る榮花に誇る輩は畜生に恥て天地の道理を辨へ皇上の御志しを體認し奉り所行を改め身を國土の爲に抛む事を欲せよ

## 第十七　皇上の御心を体認せば死なぬ人の仲間に入り眞の樂境に遊ぶ話

賢らしき女進み出て曰く唯今の御教諭にて富家へ生を望み





苦を厭はず樂を欣はず唯皇上様の御志しを體認致し國土世界の爲に業を營むやうの呉々の御諭しにて得と會通致しまして難有存じます去ながら兎角女の身に取ましては子を先立て夫に後れますと頓と生死を厭ふ氣になるものでござりますもへどうぞ生死が離れたく存じます如何致しましたら生死を離れられます此義御教示被下ば難有存じます

説師の曰く其許子を先立て夫に後るゝよりして世を厭ひ生死を離れ度思はるゝと雖も決して生死は離るゝものに非ず生死を厭ふは迷にて生死を離るゝといふ離の字は諦むるといふ義にて生死は元よりある生死と諦むるを生死を離るるといふ然るに其許生死を永く離むと思はるゝは千年萬年修行しても頓と詮なき望みなるべしさりながら生死に於て得と其理を推するに其許の如き生死を厭ふて離れたく望を

立ずとも此人間には輕々しく生れ出られぬものと覺ゆされば人の幼少の時より才藝に達したるは前世に熟習したるもへなりとて宿習に因るよしをかしま敷いふといへども今草木を見れば生じながら千殊萬樣にして種々の能あり好醜あることなれば必しも宿習にも依るまじき歟されば唐土にては周公孔子の沒後は周公孔子の如き聖人なく堯舜の如き明王なし又西竺にては釋迦佛菩薩羅漢等の數多なるも今日佛法興立の爲め出現あるべきに左もなく西竺は大抵耶蘇の法隆盛となり佛法甚だ衰微すと思ふされば明王聖賢の力にも再び此世へ出誕は自由にならざると覺へたり諸宗の高祖名匠達もし果して此世へ再誕せば世々の行業積累によりて一生より一生と轉た智德も勝れて後世程ど日增に名德の碩學多かるべき筈なれども左はなきを見れば再生の義信じがた





し聖賢すら斯の如し況や我等如き凡人猶更のことなるべししかしながら實にもと己の心に信せらるゝ事は唯鬼神の事のみありされども幽冥界の事如何樣なることならん中々知り得べき事に非らず且く思量するに大抵は顯界の如くなるもの歟と覺ゆ幽界に種々の形類あると見へて各其部屬主從貴賤貧富の差別もあるべく歟然れども幽界の壽命長短なども測り知る所に非らずといへども元鬼神といふものは人の魂神去りて幽冥界の趣に入る如きは形骸已に散じて魂氣を存するの分なれども其所行の善惡壽命の長短ある可きか其存する內の壽命の長短の間の苦樂は人たりし時の行業習因に依るべきことなれば其報果苦樂好醜種々ある事と見へたり若福智强きものは其部類幽冥の益をなすのみに非ず顯界の助をも成し人の智福をも資け未萌の禍を知り告げ曉さ

しめ善に導くことあり禍善禍悪の賞罰をも成し給ふなり因て幽冥の鬼神のこと神道佛道儒道倶にこれを爭はずして恐れ敬ふ然るに古より人の夢に詫して聖僧の形にて胎を借りて生るゝの類あれども是も多分は信じがたし若胎を借りて詫生することの自由ならば前段にいふが如く當時無量の賢聖なるべき筈なり其義なきを以て知るべしされば未來より今世が至極大切にて死して幽冥の趣に入れば苦樂貧富の差別あるはこれ今世の我等が所業行ひにありて死して善悪の作業を持行てとなれば實に今世ころ大切なるべし幽冥の部属に苦樂あるを佛道にて天堂の樂地獄の苦しみ抔と説きたるものなり又假令死して再び此世へ生ずるにもせよ前世は誰の妻にてありし我は何の某と言ひしものとて覺へて居るものは決してなければ左のみ生死を厭ふ事でもなし又生死





を何程厭ふといへども我が此世へ生れて來た時の事を思へば前世の身はさておき何れより來たといふ事も知ずされば生死を厭ふはたわひもないと知るべし又生死を厭ふなどの迷ひは其許の如く子を先立なぞして逆さま事より迷ひ初るものなれども元來は誠心の足らざるより我介抱の行屆かざる失を悔ひ果ては世を厭ふに至る歟これ如何となれば大切なる病人の一命を一人の醫師に任せて油斷し又業体に拘り病人を疎略に思ひ或は例の持病なぞゝ輕麁に思ひ九死一生の場に至り醫師を大勢招請ても何の詮なき事にてこの誠心なき失生涯つき纏ひ誠を失わず介抱の行屆く人を見聞しては其度毎に心に恥入てふも仕たら能かつたあゝも仕たらよかつたとて誠を失ふ罪生涯我がでに我が心を悼むるものにして果ては生死を厭ふなぞゝたわけた了簡に至るなり

又再應實義を謂はゝ前段にもいふが如く後世未來の事件は頓と排はず唯吾御國の皇上の御志しの如く萬民の塗炭の苦を救わんとて震襟を惱ませ給ふ思召を得と體認して面々分限相應智惠根機相應に國土國民の有益に成らん事を思ひ身命を國家の爲に惱まさん事を思はゝ其許の本望の如く生死を離れ樂域に入るべし樂域に入られし證人を云はゝ唐土にては堯舜周公孔子を初とし仁義を以て治國平天下を計りし聖賢武臣には孫子吳子諸葛孔明等の智を以て摸範と成りたる人又關雲長豫讓屈平岳飛等の身命に及ぶとも仁義に違戻せざる人々佛家には天台智者大師妙樂大師を始として諸宗の開祖等の法を以て國を安じ衆民の煩惱を斃し利益ありし賢哲達西竺にては釋迦佛龍樹菩薩天親等の論師吾御國にては神代略之臣下には大職冠鎌足菅公藤房卿楠正成等の古今





獨歩の忠臣義膽の方を始として太閤秀吉德川家康加藤清正赤穗四十七士等の國功五倫五常の摸範と成る人枚擧するに遑あらず此等の人は此以後千萬年の星霜を積むとも其芳名の朽ちるといふ事なく其德益人を化益し忠を勸め義を勸め道理を開悟すされば此人々は此末何萬年を過るとも死なぬ人にて樂域に居住し給ふ然れば皇民たるもの此死なぬ人の仲間人に注意するが悟道の肝心なり然れども上に連ねたる佛菩薩を始め諸宗の開祖蓋世の聖賢智仁義勇の大德强傑達なるが故に迚も我等如きものゝ及ばざる義と必ずしも思ふべからずそれ故前顯にも皇上の御志しを體認して智惠相應根機相應分限相應に志しを立て國民に於て最負偏頗の心なく德を行ふに或は三人五人十人乃至百人と分限相應智惠相應に德を行へば其德相應に死なぬ仲間の群に入るべしと

れ如何となれば其德を蒙りし者或は五人或は十人其德を行ひし人の名と所行の德とを生涯忘れずして何角の咄しに就きては其人の德を人々に語る毎に人を感心させ德を勸め義を勸むる者なればこれ死なぬ仲間の人に非らずやされば此體は五行の精氣に限りありて死に至り亡ぶるとも所行の德は心の變作なり因之皇上の御志しを目的として德を行ひ死なぬ仲間入らむことを注意するを急務とせよ

## 第十八　皇上を奉戴するの至誠は各其家を治むるにあり之所謂眞の知恩報恩とする話

我儘なる男進み出て曰く前席より皇上樣の御仁志の難有と御示敎被下我等萬民を憐み給ふ御志し何とも御恩の謝しやうもなくそれ故貴ての事に朝夕今上皇帝御寶祚萬々歲天下泰平五穀成就萬民快樂と祈念致しましたらば御報恩にも





相成ますや此義御尋問申上ます

訓師の曰く其許の尋問るゝ所尤可き了簡なれども拙者前段より敎示する所は皇上樣の御恩召を體認し其思召に相似るやうに志しを立て其行ひの少しにても眞似るやう敎話致せしに其許の心底に隨分尤と得意しながらそれを片附置責ての事に今上御寶祚天下泰平を祈念して報謝とせんと思わるゝは悪き了簡ならねども其許の舊習の我儘なり此我儘の弊ある時は何程今上寶祚萬々歲天下泰平を祈念しても再拜しても徒ら事にて水田の蛙が鳴が如く木偶人の踊が如し因て今祈念といふ事を委しく示さば祈といふは祈る事にて我が息を暫く止めて心を一つにして念ずる義なりされば祈念の此息を幽冥の善神鑒み給ふ事なれば口に唱へ意に念ずるといへども肝心の身の行ひが出來ぬ時は身口意の三つ揃はぬ

といふものにて譬諭て言はゞ口先や意でなんぼ眞實をいふたり思ふたりしても身の仕向けが惡しくあつたら口先でいふたり意に思ふた深切はむだ事となり諂張不實となるものなれば今上御寶祚萬々歳天下泰平を祈念するからには假令少々の損を仕ても理窟があつても御裁判の御厄介にならぬやう總じて御上樣に御苦勞をかけぬやう第一我家内を能治め專ら家業を勉强し大酒暴食をせず榮耀無益を嗜み朝寐夜歩行を慎み謙遜恭順にして行屆かぬ女房小兒には能教訓し總じて家族眷屬に至る迄我が身を思ふが如く憐を以てすれば家業繁昌し家内も能治るべし家内治まれば是天下泰平なりされば斯の如く我が身を以て天下泰平を行ひ意に祈念せば身口意の三つ相揃ふて皇上の御恩謝德とも相成べし因て我が家内の和合せずして治らざるは天下の亂にして我家内





の和合し治まるは天下の泰平なりこれ如何とならば日本國の内の山城山城の内の何町何町の内の何野何某の宅なれば何野何某の宅を離れて別に天下あるにあらざれば一家の治りは是天下の泰平なり又心の融通の邊にて言はゞ家内治らざるを面白からずとて脱走して何國何方へ至りても心にかかり樂しからず是則心の不和合を何國何方へも融通するがもへなり因て一家の不和合は天下の不和合にして一家の治りは天下の治りなれば是天下の泰平なりされば纔か一家内の不和合といへども恐れ慎しまずんばあるべからず家内不和合の原由は長たる者の我儘、慳貪邪見不義より家族是を見習ひ終に不和合を醸する事なり又長たる者我一家を能治める原由は至誠心以て皇上を奉戴し眞實心以て朝旨を遵奉し奉るにありされば天下の治亂は廣き天下の事のみと思ふべ

からず我一家の能治ると治らざるにありと會得して我一家の長たる者の身に關係すれば能相慎み和合を計るべし斯の如く面々に此義を得意して我一家を治むれば終に一町一村滿國に至らんか因て家長たる者斯の如く得意せば皇上の御恩を眞に報じ知恩報恩の者にして人道の至誠を顯すものといふべきなれば各の勵み給ひかし

敬神
訓蒙
説教道之話畢

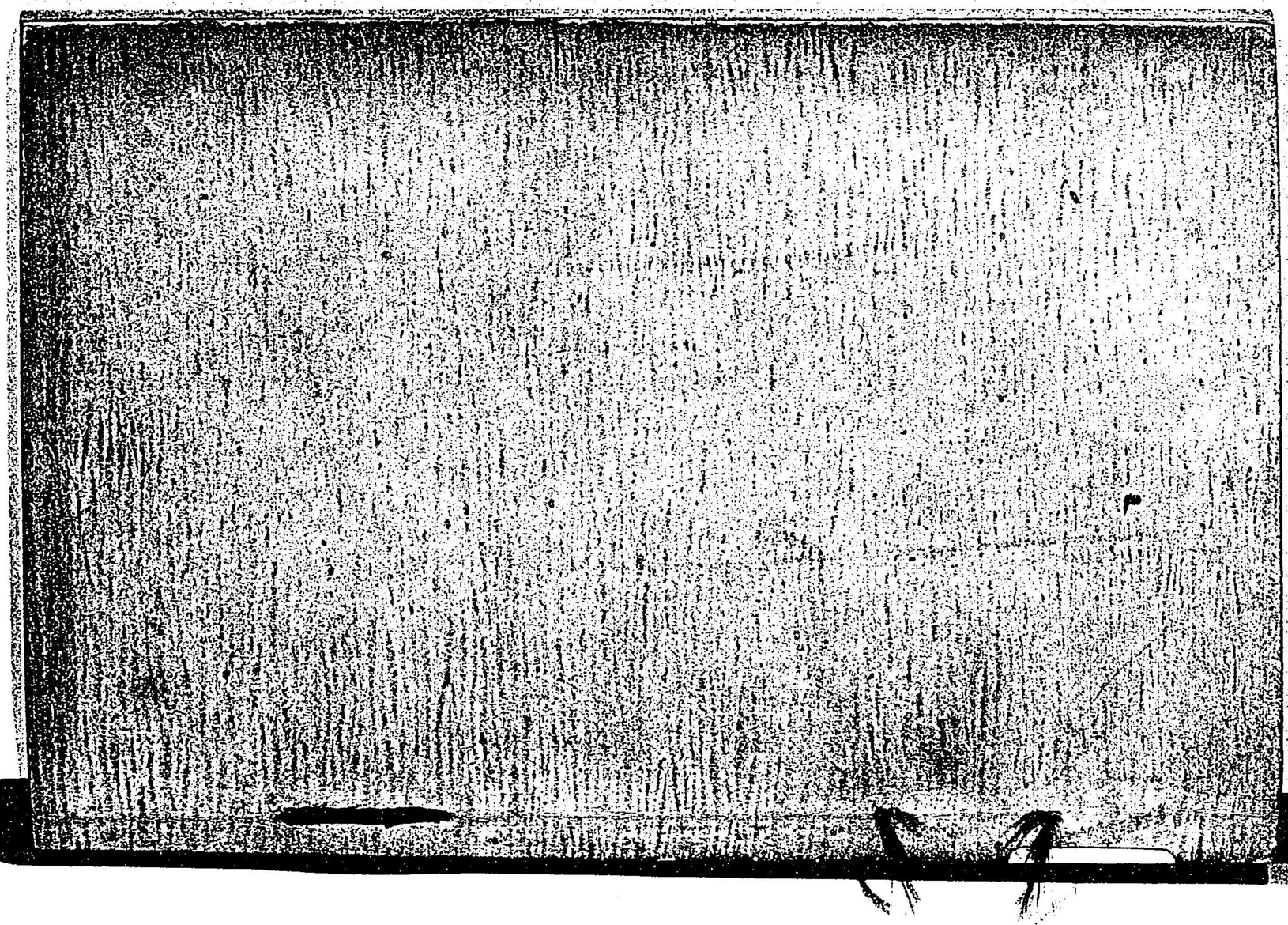

明治二十五年十月三十日印刷
同　年十一月八日出版

定價金廿五錢

發行者　奈良縣大和國添上郡帶群村　木原保吉
同　山邊郡三島天理教會所門前　今村松聲堂
同　大阪市東區南久寶寺町四丁目廿一番屋敷　岡島幸次郎
印刷兼發行者　大阪市東區南久寶寺町四丁目　岡島寶文館
發兌所　同　本町四丁目百五十四番屋敷　岡島眞七
同　大賣捌所　同　南區玉屋町　名倉照文館
同　同　新町通三丁目　庄司吉次郎

## 大賣捌所

大阪市北久太郎町　岡本仙助
同　柳原喜兵衛
奈良縣奈良　阪田書店
同　豐住書店
同　寺澤書店
奈良縣郡山　小島書店
同　大森書店
同　帶群　井久保定吉
同　平井茂
同　櫻井外山　和田ハル

## 道話書目

奥田頼杖翁著
○石門心學道の話　洋裝全一冊
中澤道二翁著
○道二翁道話　洋裝全一冊
柴田翁著
○鳩翁道話　洋裝全一冊
布施松翁著
○松翁道話　洋裝全一冊
正司南缺著
○勸善道話家職要道　洋裝全一冊
樹下恂著
○心の行衛　洋裝全一冊
○渡世肝要記　洋裝全一冊
宇喜田練要著
○勸善訓蒙說教道之話　洋裝全一冊